

Stone Letter Project

Gallery TRI-ANGLE
Takarazuka
University
6-30 November 2017

#1

“Stone Letter Project - 石からの手紙 #1”

2017年11月6日(月) - 30日(木)

10:00 - 18:00 / 日曜休館
Gallery TRI-ANGLE / 宝塚大学

Lighter but Heavier

<http://litho-l-but-h.strikingly.com>
<https://m.facebook.com/lighterbutheavier/>
<https://www.instagram.com/lighterbutheavier/>

Stone Letter Project #1

ストーンレタープロジェクト #1

石の手紙 - イメージが物質になる場所

リトグラフの作品を制作する際には、表面を研磨した金属版がかならず必要になります。この金属版は、リトグラフの技法が発祥した元である石版と同じ化学変化を起こすように処理されています。とくにアルミ版が軽く扱いやすく、現在日本で制作されるリトグラフ作品のほとんどに使用されています。昨年このアルミ版を研磨する大阪の職人がお亡くなりになり、リトグラフ用のアルミ版を研磨してくれる業者が日本で一社だけになってしまいました。いまだに購入していたアルミ版に関して、ひとりの職人が亡くなったことで他の業者をさがした結果、その数があまりに少ないことに驚き、また同時に現在日本でリトグラフ作品を制作している作家も少ないことに気づかされました。

そもそも石版画は、1798年のアロイス・ゼネフェルダの発見から、およそ220年の歴史をたどることが出来ます。版を彫ったり削ったりせずに化学的処理で製版ができることから、以来、またたく間に印刷技術の主軸として扱われていきました。日本には江戸末期に伝わりましたが、明治以降石版画は、江戸時代に発達した「浮世絵」のメディア性を継承することで、グラフィック・アートの発展の基礎を支えただけでなく、その後リトグラフとして第二次世界大戦後の「デモクラート美術協会」をはじめとする美術運動の原動力となってきました。このメディアは、石版に始まり、金属版、PS版、ウォータレス・リトグラフなど、大量印刷の時代とともに変化を続けています。それは、現在もっともポピュラーな印刷方法であるオフセット印刷の源流でもあります。しかし残念ながら現在の日本においては、この石版画のオリジナルの技法は、いくつかの美術大学と数少ない工房にしか保存、継承されていません。また日本では、石版画についての研究論文も少なく、印刷技術として発展してきたにもかかわらず、すでに忘れられた技法と化しており、その意義を問う者はデザインの分野にもアートの分野にもほとんどいません。しかも石版や金属版のリトグラフ制作を継続的に行うには特殊な材料や設備が必要であるために、大学などの工房を離れて制作をつづけることはきわめて困難です。また時代の流れとともに、扱う業者も少なくなるなど、リトグラフにまつわる厳しい現実に向き合わねばなりません。

こうした状況のなか、石版画の発見にはじまる印刷術の力を今一度問いなおすことでリトグラフの未来について考え、その魅力を検証する場をつくらうと、片山浩、衣川泰典、坂井淳二、田中栄子の四名で「Lighter but Heavier(以下LbH)」というグループを組織し活動をはじめました。そしてこのたび「Stone Letter Project (ストーン・レター・プロジェクト)」を企画したのです。このプロジェクトは、京都市立芸術大学でリトグラフの授業をうけていたメンバーのひとりの、あるエピソードに由来しています。彼は、大学の所有しているたくさんの石版の何枚かを研磨して使用可能な状態にし、そっと置き手紙でもするように学生たちの机の上に置いて帰ったというのです。この「石の手紙」のエピソードを聞いて、これなら身近な人に石版に少しでも関わってもらえるのではないかと発想し、LbHのメンバーの関係する大学でも同様の手法(なかば強引に、研磨した石版の「置き手紙」をする手法)をひろめていくことにしたわけです。これがプロジェクトのはじまりでした。

とはいえ、今さらなぜ「石版画の展覧会なのか？」という素朴な疑問があると思います。リトグラフの最大の特徴はアルミ版でも石版でも「描いたまま」が版になることです。「何を描くか」でほとんど作品が決定するといっても過言ではなく、「何を描くか」がこれまでリトグラフ制作の最大の関心事でした。それは、技術的に失敗しないうざり、描いた以上に以下にもなりえません。しかし、「何を描くか」よりも、媒体としての「石」に着目しようと考えました。

石版画の制作ではまず石という物質と向きあうことから始まります。まるで石彫でもするように金剛砂で何度も表面を研磨します。それは、いまだに研磨業者頼みだったアルミ版での作業に比べてかなりの重労働ですが、アルミ版が一度きりしか使用できないのに対して石版は、研磨さえすれば好みの表面を得ることができ、しかも何度でも使用できるという長所があります。そうやって研磨した真新しい石版の表面は、過去の堆積物である石灰石の歴史の断面だともいえます。その表面に油性の描画材で化学反応をおこさせて版を制作し、紙に刷りあげるといった作業行程は、古典的な印刷技法を再確認させてくれるだけではありません。石版画の場合、自分の描いた像が、プレス機の圧力によって石から無理矢理剥ぎとられたインクそのものであるという、いわばイメージの物質性を再認識させてくれるのです。また技法としてのイメージの定着と作品の複数性だけを考えると、アルミ版でのリトグラフ制作においては、アルミ版のプレートマークはほとんど不要な存在ですが、石版画の場合、イメージと物質を考える機会として、石版のストーンマークである石版そのものの形を意識せざるをえません。そのストーンマークが石版という「石」の存在と、それを刷り取る「紙」の存在と、両者の間にある「インク」の存在を明らかにするのではないかと思います。いまだに金属版ではあまり意識することのなかった、描いたイメージが物質になるという感覚が、「石」を版とすることによって「紙」と「インク」のそれぞれの物質性に気づかせてくれ、さらにはイメージを物質として意識させるこの「新しい感覚」がとても現代的で新鮮に感じられたのです。忘れられた技法になりつつある石版画やリトグラフの未来を考察するためのきっかけとして、この「新しい感覚」

を活かすことはできないだろうかと考え、この度の展覧会を企画するに至った次第です。

リトグラフの制作をしているアーティストの多くは、リトグラフをひとつの表現媒体としながら、他の表現も同時に採用しています。事実、リトグラフが発明されてから多くの芸術家が、本業である表現方法(たとえば絵画)とならんで、それと変わらぬ情熱をもってリトグラフと取り組んでいます。かれらが感じていたリトグラフに対する情熱や関心について知る手がかりはそれほど多くは残されていませんが、たとえばルンボンはつぎのような言葉を残しています。「じつに不思議なのは、この扱いやすくて表現力に富む芸術を画家たちがもっと深く究めようとしなかったことだ。それは感受性のもっとも繊細な刺激に添えてくれるというのに」。現代のわたしたちがリトグラフという古典的な版画技法で制作をすること、過去の芸術家が当時最先端であったこの表現方法で制作することはまったく同じではないと思いますが、かれらが版に向かう際に感じていた面白さは現代でも共通して感じることが出来るはずだ。

多くの巨匠たちが石版画制作で感じたこの共通の感覚や、わたしたちが石版画制作で得られる現代的で「新しい感覚」は、おそらく誰もが同じように感じられるのではないのでしょうか。この感覚を共有するために、石版画による表現を共にする試みが「Stone letter project」です。ジャンルを越えたアーティストや学生たちが初めて石版に向かい、制作していかなくて、かれらの感じる面白さ、またおそく起こるであろうアクションメントへの緊張感などを共有しつつ、石版に触れることで新鮮な何かを発見できるのではないかと期待しています。うまくいけば新たな表現の可能性を探りあて、石版画でしか獲得しえない表現の独自性を明らかにすることが出来るかもしれません。このプロジェクトは、いまやわたしたちにとって、すこしばかり遠い存在になってしまったリトグラフの魅力を再発見するための試みなのです。

田中栄子 (Lighter but Heavier)

この度 LbH は宝塚大学のギャラリー「TRI-ANGLE」にて「Stone letter project」展を開催させていただきます。先日、京都市立芸術大学にて京都府専売局平版製版室で制作されていたタバコのラベル印刷の石版画の原版が、大学内の倉庫から37年ぶりに発掘されました。展覧会ではそのラベル印刷の原版と私達が制作した作品の原版である石版、それによって刷られた紙としての作品を展示しています。それは時代と共に衰退する古典技法の継承だけではなく「石」と「インク」と「紙」によって得られた「新たな感覚」と新たな石版画の表現や視点を提示できればと思います。石版画の作品制作に参加して下さったアーティストや学生の方々、またこの展覧会で石版画の事を初めて知って下さる方々、また関わった全ての方々に石版画の魅力を共に感じていただければと思います。

EVENTS

ギャラリートーク

11月25日(土) 14時-17時
ギャラリー TRI-ANGLE
入場無料

石版画シンポジウム #01

一石版画をめぐるお話し
出原 司 (京都市立芸術大学) × 武蔵 篤彦 (京都府立大学) × LbH (片山浩、衣川泰典、坂井淳二、田中栄子)

ワークショップ

11月18日(土) 13-17時
版画工房
参加費 300円
予約不要 (小学生から)

昔のラベル印刷を再現しよう!

明治から昭和初期まで実際に使われていた石版で当時のラベルを刷ってみましょう
*汚れても構わない服装かエプロンの持参をお勧めします

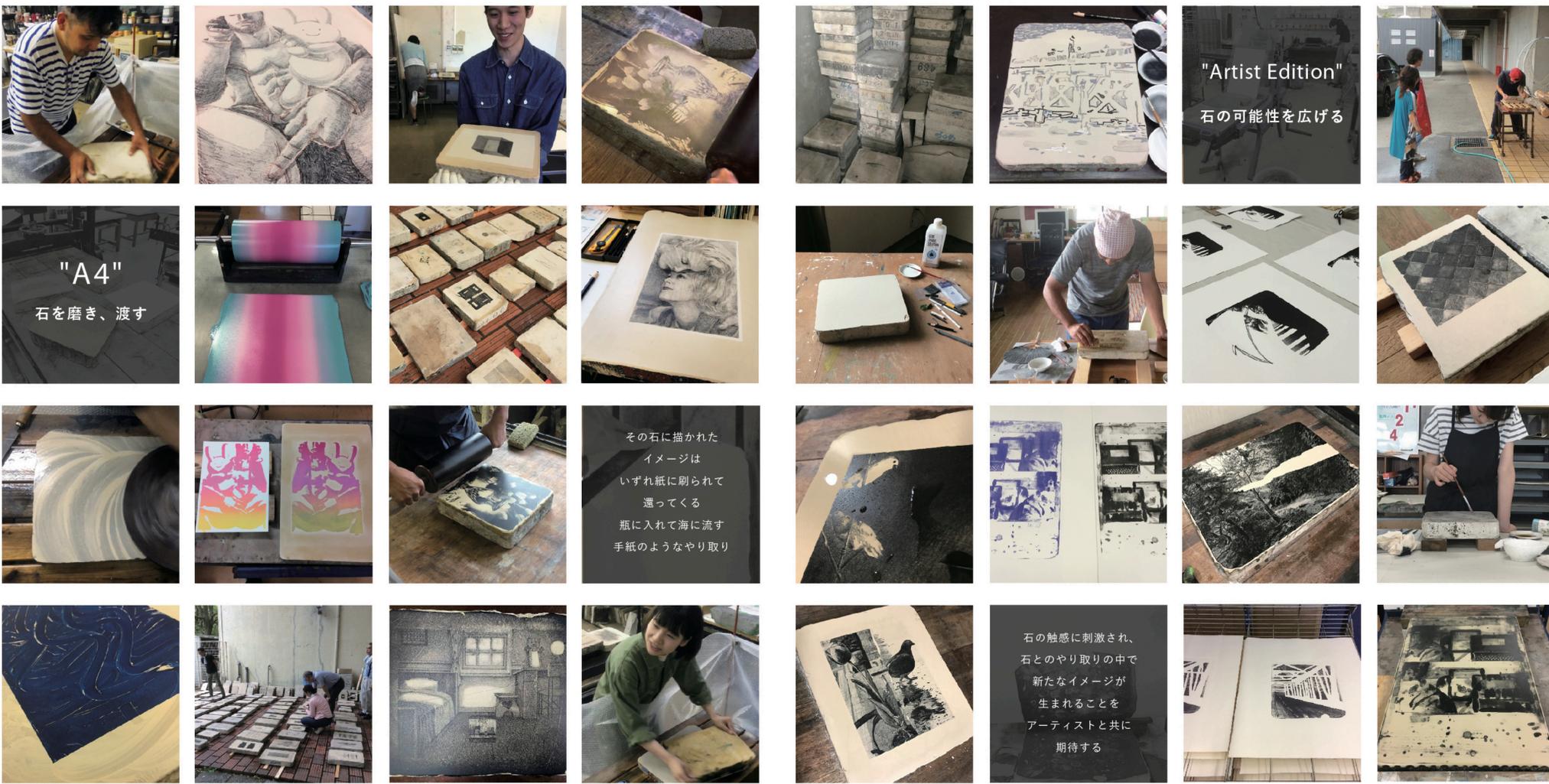


交通アクセス
□阪急「川西能勢口」駅より
バスターミナル南側2番のりばから
専用バス(宝塚大学行)約5分
※運行時刻は事前に確認ください。
□JR「川西池田」駅からは専用バスの
りばまで徒歩約5分
□阪急「雲雀丘花屋敷」駅より
阪急バス(愛宕原ゴルフ場行)約5分
「長尾田」下車すぐ

宝塚大学 宝塚キャンパス (造形芸術学部)
〒665-0803 兵庫県宝塚市花園数つじが丘5-7-27
LbH代表 090-9992-1485
<http://www.takara-univ.ac.jp/zoukei/>

Takarazuka Univ.
宝塚大学 造形芸術学部

design: Hiroshi Katayama (LbH)



#stoneletterproject



- | | | | | | | | | | |
|---|--|---|---|--|--|--|--|--|---|
| 芦川瑞季
足立夏子
伊賀晴香
池田高広
石田利菜
伊藤公子
今江ひとみ
上田優奈
上森響子
大橋由利
大月美歩 | 大崎 緑
大沢理沙
大原爽子
岡本珠実
小原若菜
角杏花
加藤 恵
漢 瀧
木子幸恵
木全由希菜
浦田めぐみ | 久保菜月
國廣 澗
瀬古清水
小林桐美
古屋真美
酒井裕里
佐藤雄飛
Sioux Terasu
杉林美咲
鈴木富美子
周戸 茜 | 助石一枝
関 萌瑚
瀬古清水
武雄文子
竹下千咲
田島恵美
手冢彩夏
Chantisa Tetanonskul
you-ye tomita
Panida Duangkaew
永田聡子 | 中村公美
中里 葵
西村 涼
野中隆之介
濱崎美咲
藤崎勇彦
山本知穂
吉武英里香
陸 瑠妃 | 宮寺彩美
宮前光希
六根由里香
舘岡亜弥
山田真実
山本知穂
吉武英里香
陸 瑠妃 | 片山 浩
×
石田典子 中田由絵
伊藤沙織 西村正幸
伊藤里佳 マツトヨコ
小澤香織 森田 朋
栗桑香澄 吉田佳代子
東木清美 Duncan Buren
栗木義夫 Scarlett Rebecca
近藤千鶴 | 衣川泰典
×
阿部大介 武蔵篤彦
イクガキタヒコ 山内裕美
板津石版画工房 山崎 慧
大八木夏生 吉田 潤
岸 雪絵 劉李杰
鹿野 健 | 坂井淳二
×
出原 司 坪田政彦
稲垣元則 三井田盛一郎
今井 恵 丸尾純美
遠藤竜太 元田久治
大崎のふゆ枝 吉岡俊直
河股由希 Jaume Amigó | 田中栄子
×
上田順平 平川文江
大島成己 水上雅章
倉地比沙支 増田妃早子
児玉靖枝 安井良尚
東 明 吉岡千尋 |
|---|--|---|---|--|--|--|--|--|---|

協力: 愛知県立芸術大学 大阪芸術大学 九州産業大学 京都精華大学 京都市立芸術大学 女子美術大学
宝塚大学 東京藝術大学 名古屋芸術大学 武蔵野美術大学 プライント大学 (UK)

<http://litho-l-but-h.strikingly.com>
<https://m.facebook.com/lighterbutheavier/>
<https://www.instagram.com/lighterbutheavier/>